
思い出の記

村田学園の 精神の上に

村田簿記学校旧教員

倉 渙



この度、村田学園創立八十周年記念式典が盛大に行われ、心よりお祝い申し上げます。

本学園は、村田謙造先生が珠算・簿記こそ産業教育の基礎であるとの信念のもとに明治四十二年十一月「銀行会社事務員養成所」を創立され、さらに、昭和六年三月、当時とかく軽視され勝ちであった女子の社会進出の必要性を痛感され、女子の計理教育推進のため「村田女子計理学校」を創立されたのであります。その後大正十二年の関東大震災、昭和二十年の戦災など再度にわたる校舎焼失にもかかわらず七転八起、不撓不屈の精神をもって再建に努められたのであります。

思えば、学制改革により昭和二十三年三月、計理学校を現在の村田女子商業高等学校と校名変更、焼跡の現在地に先生の住宅に隣接して建てられた平家建の三教室で、第一回の入学生二七名と職員五名での再出発でした。体育の時間には校庭の草取りや石ひろいをする状態で発足した当時の女商が、その後、照子先生の率先垂範、躰を重点に、教職員一致協力、簿記会計の知識技能向上に努められ、今や都下有数の女子商業高校となり、一方簿記学校は校長先生の日夜

献身的努力により理想とされた神保町の一角にそびえる新校舎の建築を果たされたのであります。

さらに、現理事長も守成の難を克服、校舎の拡張増設に次いで、市川に待望の新校舎を建設され、現在職員二四五名を擁し、簿記会計に関しては自他ともに許す一流の専門学校として活躍されております。

かくて、今日まで三十万余の卒業生を送り出し、社会の発展に寄与された業績は窮めて顕著で他に類をみない偉業といわねばなりません。

終りに、本学園が建学の精神に基づいて、その特色を発揮されるとともに、この輝かしい伝統の上にさらなる新たな創意工夫を加え、未来からの要請に対応するすばらしい教育を推進され、一層の充実・発展されることを、心から祈念して祝辞といたします。

珠算教育のきつかけ

村田簿記学校旧教員

辻 清



村田学園の創立満八十周年を迎えられましたことに、心からご祝詞を申し上げます。

八十年という長い歴史から見れば極めて短い間ですが、お世話になった私にお祝いを申しあげる機会を頂戴いたしまして、まことに恐

縮に存じます。

大学の高等師範部に籍を置いていた昭和八年の夏休みに夜間お世話になり、村田先生のご指導をいただいたのが、私と村田簿記学校とのそもそもの縁の始まりでした。同年の暮に村田謙造先生のお使いとして山田惣一郎先生が小宅にお見えになり、見習助手として簿記学校に採用したいが、というお誘いを頂戴いたしました。私が今日まで五十有六年という長い間珠算教育の道を歩み続けるきっかけを与えていただいた村田謙造先生に、衷心より感謝申しあげる次第でございます。八十周年という長い村田学園の歴史の中で、私の学園とのかかわりは昭和八年の暮から前後十年程度の極めて短い期間ではありましたが、私にとっては何物にも替え難い貴重な十年でありました。

村田先生は「珠算道」とよくいわれました。柔剣道・書道・華道・茶道と同じように、珠算道をお考えになっておられたのではないでしようか。とかく技術面だけが重視されがちですが、技術の錬磨を通して人格を磨かなければならないということを、村田先生は常に説かれておられました。

また村田先生からは「簿記」と「珠算」は車の両輪のようなもので、どちらが欠けても成り立たないといわれ、私は学校で時間の許す範囲で村田先生、山田先生の簿記の授業を受講させていただきました。また二・二六事件のあった当時、学校の授業の繰り合わせでご不便があったことと思いますが、私の珠算技術向上のために、豊橋市の吉見速算学校(吉見政吉校長)に修業に派遣していただいたことも、私にとって貴重な体験を与えて下さったと感謝申しあげております。

その後、村田先生から文検の受験を勧められ、川村貫治先生をはじめ、文検の先輩の方々をご紹介いただきました。文検に合格後、長野県の松本商業から浦和商业学校に転勤してから、村田先生のお招きで夜間簿記学校にお世話になりました。村田簿記学校にお世話になった当初、現理事長の照子先生が本郷西片町のお宅から綺麗なお母様とよく神保町の学校へおいでになり、事務室受付のカウンターに背伸びをされている姿が今でも思い出されます。

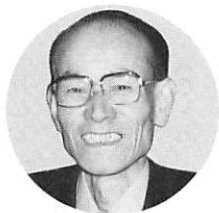
昭和九年・十年頃に卒業された女子計理学校の卒業生の中に、いまだに名前と顔を覚えていた生徒が何名かおられます。故人となられた村田謙造先生、山田惣一郎先生、佐々木先生ほか、お世話になった先生方のご冥福をお祈り申し上げますとともに、学校法人村田学園の限りない一層のご発展を心からお祈り申し上げます。

(現在・学校法人近藤学園浦和簿記専門学校職員／全国経理学校協会電卓検定試験作問委員)

村田簿記学校に 在職した頃

村田簿記学校旧教員

中杉修二



私が村田簿記にお世話になったのは、たしか昭和三十一年の春であつたと思う。学校は簿記本科が設けられて二、三年経ったところで、まさに大きな発展を迎えようとする時期であつた。はじめて受

持ったクラスは本科四組で、教室は現在の三号館の四階であった。

この建物はもと万崎というミニ百貨店で、私にとっては若い頃商品の配達をしたこともある懐かしい場所でもあった。

最初の一年間は、教室はマイクの設備がまだなくて、自前の声に頼るしかなかった。さらに、窓には防音設備もなく、交差点の騒音が遠慮なく飛び込んでくるので、黒板に解答を書いた後は教室の真中に進んで吠えるような授業をする毎日であった。ことに、当時まだ走っていた都電の停留所の真前であったため、電車の発進する時の轟音にはただ黙するばかりであった。

当時、旧館（現一号館位置の木造校舎）の職員室には創立者（前校長）のお席はなかった。校長室は、通り一つ隔てた（現在洋服店へ？）となっている）ところにあつて、日常に直々のご指導をお受けすることができなかったのが残念であった。創立者の数々のご苦心のほどは折にふれて直接にお伺いすることもあったが、多くは先輩の諸先生方から日常の校務の間にいろいろとお聞きしたものである。授業の終わった深夜に新学期開講のポスターをマスクで顔を隠しながら電柱に貼って歩かれたお話、その他等々をお聞きして、到底私どもには真似のできないご苦勞の連続であられたことを伺ったものである。

このような創立者のご苦勞が実ってきたのであろうか、奉職後は学校の生徒数も次第に増えてきて、校運はますます隆盛の道を歩み続けていた。昼間本科生は十クラスを超えるようになり、夜間の速成科四月生などは教室のやりくりがつかず、八クラスで打止めというのが毎年のこととなった。このような中でわれわれ教職員も漸次増員されてきたのであるが、担当クラスの増加に合せてゆくの

つとの状況であつて、いわゆる昼間・夜間の連続であった。

また、珠算などの空時間について、処理が定まっていなかったこともあつて、これらの空時間に夜の講義の準備をと思っていると、他の職員の病欠欠講の補講に出かけるなど、自分の授業の準備も思うに任せられないことも多かった。特に検定月の十一月などは一ヵ月ほとんど休みのない月となり、また、検定の日、その日のうちに採点まですべてを終えることとなつていて、帰宅も夜遅くなつてしまふのが普通であつた。

生徒の増加に伴つて重要なことは、授業内容の充実でもあった。企業会計原則制定後の会計学の著しい進歩、それらに伴つた税理士その他の国家試験の難問化など、今までの知識に加えて新しい対応を迫られる事情にあつた。

当初、税法関係の講座は外部の講師にお願いしていたが、講師の事情で欠講も多く、授業内容も村田式の例題実践中心のきめ細かい積上方式ではなかったようである。このような事情からか、税法関係の講座も専任講師で担当すべしとの声があがつて、私の担当は法人税法ということになった。私は税法についてはそれまでまったくの素人であり、また、税法の講義を聞いたこともなく、初期の生徒諸君には大変失礼なことであつたかも知れない。

しかし、そんなことを悔んでいる暇もなく、市販の解説書を師に、もう夢中に準備に没頭したものである。せっかく時間をかけて用意した問題も時間の前半で終つてしまつて、残り時間の授業に困ったこともある。しかし、ありがたいことには、授業開始前にはどうもはつきりしなかった点、授業中の話しの進むに従つて、はじめて自分で納得ができるようになり、人知れずほつとするようなことも

ままあった。

税理士試験合格の秘訣は、教壇に昇って人に教えてみることだといえる。簿記より出た私の税法へのアプローチは、どうしても商事決算と税法の所得計算との関連ということになった。講義も大分簿記くさい授業になったことと思われるが、時間だけは欠講も少なく、何とか責にこたえることができたのではないかと思っている。

この時期において忘れられないのは、藤田誠一先生のことである。藤田先生が何時から村田簿記に来られたのかは存じ上げないが、私が奉職当時、教務主任として勤務しておられた。前述の通り、残念ながら、前校長には親しくご指導頂けなかったのであるが、藤田先生には教師の第一歩からいろいろとご指導を受けたものである。

この頃の藤田先生は、ほとんど学校に泊まり込まれて（ラーメンと冷奴は有名であるが）頑張っておられ、上級科目を自身担当されるほか、授業計画の立案など、忙しい毎日を過ごしておられた。このような先生の毎日には、何かと毀誉褒貶もあることであろうが、村田簿記の発展期には大きな役割を果たし、もちろん、創立者の大きなご指導の下ではあるが、少なくとも価値ある内助のつとめを果たされたものと思われるのである。

このような状態で、私なりに結構忙しく毎日過ごしていたのであるが、昭和四十一、二年頃、藤田先生がご都合で退職されて、私が教務主任を拝命することとなった。任に就いて先ず感じたことは、その職務の何とも忙しいことであつた。事あるごとに「ちよつと」と引き出されるのがずいぶんと心身にこたえたように思われる。そのうえ、当時の給与制度の関係もあつてか、法人税講座を引き受けてくれる人がいなくて、講義の準備もあつて忙しさに拍車をかけ

ていたようである。もともと性格的にも主任という柄ではなかったこともあるが、五十三年の末にとうとう健康を害して休職を願ひ出ることとなった。あまりにも突然であつたため、学校にも、また同輩諸先生方にも大きなご迷惑をお掛けすることとなった。

年齢の故もあつてか入院が長期となつたが、幸いにもどうやら五年後に退院することができた。尚、一年体調回復に努めたうえ、学校に復職をお願いしたところ、心よくお許しを頂いて速成科の授業に参加させて頂けることとなった。数年後の今、浦島の目に第一に感じたことは、学校全体が一層活発に躍動している様子であつた。

職員室の空気も一新が感ぜられ、若い先生方が、税法その他の科目の授業に活々と臨まれておられるのが何とも頼もしい感じてあつた。私は、なお健康に多少の不安もあつたので引続き速成科担当に終始したが、それでも何とか有効な授業をと問題の作成に時間をかけわずかながらも老年の生甲斐を感じさせて貰つたものである。甚だ迂遠なことではあるが、複式簿記の原理について私なりに理解できたのも此頃である。

昭和五十七年九月、定年をもって退職することとなった。本校にお世話になる以前にも多少経理実務の経験をもっていたわけではあるが、私にとっては本校に勤務させて貰つた二十余年が人生のほとんどすべてといつてもよい年月であつた。病気の躰を抱えながら何とか一生を燃焼させることができたことに喜びを感じている次第である。心からの感謝を込めて、勝手な本稿を終ることとする。

新米教員の思い出

村田簿記学校旧教員

今井市太郎



村田学園の創立八十周年、まことにおめでとうございます。心からお祝い申し上げます。

私は、昭和三十二年から同五十五年までの二十三年間在籍させていただいた者ですが、今日の学園の隆盛を目のあたりにするとき、私が新米教員だった頃に比べて、隔世の感を禁じ得ません。

私が就職した当時、現在の本館の場所は土地もずっと狭く、教室数五室の本造二階建の校舎でした。そして、狭い職員室の中で先輩の先生方に混じって小さくなっていました。

創立者であり、校長であった村田謙造先生をはじめ、諸先生方から色々とご指導をいただきながら毎日を夢中ですごしたことが昨日のように思い出されます。

八十周年の記念誌発行に際して、いくつか当時の事を思い出してみたいと存じます。

何しろ年もまだ若く、浅学非才なものですから、時間の許す限り校長先生はじめ諸先生の講義を、一生懸命教室の最後方で聴講しました。そのうち最も印象に残っているのは、ある先生の授業のとき、資産・負債・資本の説明でした。「資産とは、誰でも欲しいものなり」

たった三秒です。「負債とは、借金なり」たった二秒です。もちろん、具体的な説明はそのあとで色々ありましたが、最初の何秒かですばり、その本質をたたき込んでしまう、なるほど、これが村田式かと恐れ入ったものです。

私も学生時代は商科でしたから、会計学の教授より、資産・負債等の講義を受けましたが、「資産とはこれこれである」と外国の有名な学者の言をまじえて一時間位、「負債とは」で同じように一時間位、聞いたことがあります。もちろん、理論に重点をおく大学と実務を教える簿記学校では目的が違いますから、授業の内容が異なるのは当然ですが、簡単明瞭に説明をして、すぐ実務的な練習に入る方法に、おどろきと同時にその伝統を感じたものでした。

何カ月か過ぎて、少し勤務に馴れてきた頃、校長先生からご指導を受けました。それは、

「ていねいな字、特に数字をきれいに書き、生徒にもそのように教えること」

「簿記の先生は黒板に線を書くとき、定規を使うようではいけない」「自分の勉強ももちろん大事だが、もっと大切なことは、生徒にわかりやすく説明するための、教え方の勉強をすることですよ」

ということでした。私は退職するまでの二十三年間、ずっとこのことを肝に銘じて勤めてきたつもりです。

当時の速成科・専攻科、特に夜間部は、年齢的にも中学を卒業したばかりの十六歳位の人から七十歳位の人まで、職業も会社社長・重役・弁護士・商業高校の先生・会社員・大学生等、実にいろいろな人が一つの教室と一緒に勉強するので、教える方は、その全部の人達に合うように授業をしなければならず、難しい反面、やりがい

もありました。

あるクラスを担当したときですが、前の方の席に七十歳位の男性と十八歳位の女性が、いつも仲良く授業を受けていることがありました。おじいさんとそのお孫さんかな？ と思いながら「どんなご関係ですか」と聞いたたら、「私は自分の経営する会社の社長で、この人は事務員です」といわれたので、そのほへえましさに、思わず「頑張って下さいね」と言ったこともありました。

その後、一年制の本科を担当するようになると、春・秋に日帰り一泊の旅行にいくのですが、どんな所へ行っても、バスの前に貼ってある簿記学校の校名を見て、「私は〇〇年に△△先生の生徒だったのですが、△△先生はお元気ですか」と懐かしそうに話かけてくる卒業生が必ずいて、今更ながら、古い伝統の重さをずっしりと感じたものでした。

とりとめもなく、いくつかの思い出を書きましたが、今は退職して晴耕雨読？（それほどのものではありませんが）の日々を送っている、伝統に輝く最高の權威を誇る村田学園で、創立者故村田謙造先生と、その建学の精神を立派に受け継がれている現校長村田照子先生の下で、微力ではありましたが少しでもお役に立てたことを生涯の誇りに思っている次第です。

最後に、校長先生はじめ諸先生方、並びに職員の皆様のご健康と、村田学園の一層のご発展を心から祈念致します。

村田学園史の

ひとつま

村田女子商業高等学校旧教員

坂下 愛子



『有算者勝』。これは村田謙造先生の座右の銘であり、村田学園建学の精神でもある。夙に神みそなわし校長をつかわし高邁な理想と不朽不滅の真理を世に人に伝えしめ給うたのである。この深遠広大な銘こそ先生の意図する簿記・計理の精神であり、究極する処、倫理哲理の奥義に到達し、国・時代・人間を興し、あるいは破滅させる原動力ともなる幽邃にして厳肅な戒めでもあり教訓だったのである。真実に対する虚偽、清廉潔白に対し不誠実、信頼に対する不正直、これらは皆校長の信念であり、永遠の理想であったのだ。

この顕著な現れは、かつての「ウサギ小屋」「働き蜂」と響きを買った敗戦国を一躍国際場裡に「経済大国日本」に建て直したではないか。モラルの面では倫理欠如の為リクルート汚職、政治の腐敗を惹起するなど、国を、時代を、人を動かしたではないか。思えば校長の慧眼はすでにこの理を見通しての垂範の教訓であったのだ。

さて、私と村田女商とのふれあいは昭和二十八年に始まり、昭和五十五年に終わる。在職中の数々の思い出が村田史を語る一齣ともなればと思ひ、八十周年記念誌へのこの稿を編む事にした。

私の村田女商就任当時、校舎はあっても生徒数僅少、現校長二十

八歳の照子先生を中心に、鳩首対策を練り、東奔西走の生徒募集が始まり、幾多の難行苦行を経て集まった生徒が第三回生だった。私は校長先生直々の推薦の生徒が及落会議で不合格と知るや、義理と人情の板挟みに窮境逃避と中学校長への詫びの為に辞任退職を決め、巷をさまよい歩いた辛い思いに今も涙する。

昭和四十四年、創立六十周年記念の準備委員会に出席した際、文教教育に一生を捧げた校長先生の切々たる希望として「式典に文部大臣の臨席」を伺った時、其の夜考えあぐねた末、ああそうだ、文部大臣の坂田道太氏は義妹の従兄弟に当たる。妹にその労を取るよう頼もうと名案が浮かんだ。早速妹に電話したが、時あたかも安保騒動の真只中、文部大臣の公務以外の行動は厳に御法度との事を聞いたが、それを強引に押し、秘書を通じて道太氏に連絡を願った結果、秘書に面会が許された。直接単身で文部省を訪れ、秘書の厚意で大臣室に通され大臣との対談、来意の主旨と校長の念願をると伝え、計らずも大臣の承諾を得た（但し、式当日閣議開催の際は不可能との条件付で……）。

マンモス大学日大ですら断られたのに、私立高校の祝賀会によくぞご臨席を……と、感動一入。いよいよ式当日となった。私は会場共立講堂で文部省との電話連絡係、「急速閣議開催、閣議終了次第大臣式場へ出発」との連絡。式次第は時を刻む如く、進行も半ば過ぎた頃、「只今閣議終了、直ちに大臣式場に向かった」の電話に私は腰がぬけんばかり。警戒網張り廻す中を護衛に囲まれて大臣到着、式場への先導。大臣の臨席で場内は驚異と静寂。村田の長い歴史を語り、斯界に残せし功績を讃えた祝辞に、場内は校長へ畏敬の念深まり、感嘆と感動の中に式は終了した。校長の栄誉と満足如何ばかり

かと推し量り、これこそ一生一度の校長へ報恩——親孝行——だと欣喜の涙はふり落つ。

画期的な思い出は語る。昭和五十年二月十九日、校長は神田万世橋の同和病院に御入院。風邪がこじれ急性肺炎を起こし、二十一日危篤の報が伝わるや、私は夢遊病者のように（当時左脚骨折の為松葉杖にすがつての通勤だった）成田山へ病氣快癒を祈願しゴマを焚きに行った（あの高い急な階段を松葉杖でどうして上がったか無我夢中でわからない）。札を頂き病院に直行、面会謝絶で御長男の修氏に階下でゴマ符を渡した際、怪訝そうにゴマを焚いた時刻は？と聞かれたではないか。私が本堂でゴマを焚いた時刻と校長が意識混濁たる中で「何か不思議な赤い火が脊筋を貫くを見た」と述懐された時刻が余りにもびつたりしていると修氏は蒼白な面差の中に驚異の念かくし切れず。私もゴマの火の靈験あらたかさに愕然とした。二十四日アメリカから帰国の日野原先生を待つて聖路加に転院なされ、一か月にわたる万全の治療を受けられたが、三月二十三日遂に永逝あそばされた。痛恨極まりなし。

初代校長の理念を理念とし、その真髓を身に体された二代目校長照子先生は生来叡知、鬼才にたけ、時代感覚にさとい洞察力、卓越した企画性に富み、敏捷な反応力、抜群の実行力を備え持ち、加うるに温故知新の要素も。父君の建学の精神に基づく倫理の道を世の為人の為に益々御涵養につとめられ、校運隆盛に尽誠の努力をあそばされん事を祈願してこの稿をおく。

日々を楽しむ

村田女子商業高等学校旧教員

中村 貞喜



創立八十周年、おめでとうございます。以前自分の勤務していた学校が益々発展し、めたい記念日にお祝いを述べることは、この上もなく嬉しいことです。私は数学の教師として昭和三十年頃より約十年間お世話になりましたが、当時の生徒はとても純朴で、勉強はもちろん、部活もよく努力し熱心でした。一番嬉しかったことは、素直に教師のいうことを聞き、よく協力してくれたことです。夏休みや冬休みには登山や水泳教室、合宿やスキー教室等たくさん行事がありました。どの行事にも参加させて頂きましたが、一度の事故もなく、良い経験であったとともに、今も猶楽しい思い出となっています。これも皆、生徒と教師が相和し、協力的であったためだと思います。また、先生方も家庭的で、職員室もとても和気あいあいとして楽しく、今でも当時の職員で毎年親睦会を持ち、楽しい交友を続けています。私の四十数年の教員生活中、村田女子商業は最も楽しい学校でした。卒業生を送る会に、専門でもない私が自分のクラスに三部合唱を教えて伴奏したのも、私の楽しい村田校勤務の心の現われだと思えます。そのほかにも、楽しい思い出は数多くあります。

私の好きな座右の銘に『私の前に山があるから』という言葉があります。これはイギリスの探検家ヒラリーが、世界で初めてエベレスト登頂に成功したとき、新聞記者の皮肉な質問に答えた意義深い言葉です。「大変な犠牲を払ってのこの度の登山は、名を上げるためでも出世のためでもなく、山好きな私の前にエベレストという山があったから、たまたま登りたくて登っただけなのです」と答えたのです。当時この言葉が有名になりました。

在校生の皆さん、よい点をとるために勉強するのではなく、一科目でもよい、その勉強をすることが楽しいから「私の前に簿記の本があるから」「私の前に数学の本があるから」という科目を作ってください。成績はひとりでに向上します。また、卒業生の皆さん、会社でお茶当番をしても、不平に思ったりせずに、上の人に認めてもらうためでなく、「皆さんの喜んで下さる笑顔を見るのが楽しくて……」と思ってやって下さい。知らないうちに貴女に幸福がやってまいります。家庭にあっても、「私の前にこの仕事があるから」それをすることがとても楽しい主婦になって下さい。

村田の卒業生が、職場にあっても家庭にあっても幸福な人生を歩んで行くことが、村田学園の存在の意義であり、発展につながるのです。

卒業生の幸福と村田学園の発展を祈ってやみません。

昭和五年のポスター

村田女子商業高等学校旧教員

小澤 勇



村田学園は、創立八十周年という記念すべき佳き年を迎えられ、まことに慶賀のいたりとお心よりお祝い申し上げます。

また、この佳き年を迎えるにあたり、あらためて、創立者であり、前理事長兼校長であられた故村田謙造先生と、その遺志を継がれ、学園を不動のものとされた、現理事長兼校長村田照子先生のおふたりのご功績と、その信念と実行力、加えて不断のご努力に対して、深甚なる敬意を表すものであります。

ひと口に八十年と申しますが、決して短いものではありません。

震災・戦争を含んだこの期間の紆余曲折が並大抵のものではなかったことは、容易に想像されます。その苦しい長い年月を、父娘二代で乗り越え、この佳き日を迎えられたということは、まことに偉大というより言葉がないと私は考えております。

想えば、私が村田簿記学校という名前を知ったのは、昭和五年、当時本郷真砂町にあった旧制商業学校に入学した時でした。国電の水道橋駅を利用しておりましたので、その付近の電柱に貼ってあった看板・ポスター等によるものでした。当時十二歳の私は、ただなんとなく眺めたに過ぎないでしょうが、どういふわけか、脳裡に深

く刻み込まれています。

その後、珠算の選手として各種大会に出場するようになり、競技委員としての村田謙造先生を知り、その先生が、簿記・珠算の大家であり、村田簿記学校の校長先生である、と教えられました。大会場で朗々たる美声で読み上げられる、鼻下にひげを蓄えられた、いかにも紳士と呼ぶにふさわしいお姿は、一見厳しい人だという感じでした。しかし、親しくお話をうかがうという機会には残念ながら恵まれませんでした。大先輩と一介の書生との差は、歴然としたものがあつたのです。

昭和十三年、私は扶桑女子商業学校（当時は田端商業女学校）に勤務いたしました。どういうご用事があつたのかわかりませんが、ある日、謙造先生が、その学校の経営者富永もと先生を訪ねてこられました。その時、私は大変なつかしくご挨拶を申し上げたのが、親しくお眼にかかった最初でした。村田女子計理学校（現村田女子商業高等学校）のことを知ったのもその折でした。

その後も珠算の大会等でお眼にかかる程度でしたが、そのうちに私は応召し、野戦勤務を経て昭和二十一年復員し、復職しました。

戦後の混乱の中で勤務校は昭和二十四年閉校になってしまいました。任用試験を受けて、公立の中学校と高等学校の勤務を経て、紹介されて村田学園に職を奉じたのは、昭和三十一年でした。

昭和五年に看板を見て名前を覚えた学校、珠算大会でお眼にかかった近寄りたいたい感じのあの大家、村田謙造先生の学校にお世話になるとは思いもかけぬことでした。同時に、かつての勤務校扶桑女子商業学校の校長が、玄米食でも有名な二木謙三先生だったことと思ひ合わせ、偶然にも、二人のケンゾウ先生にお仕えることにな

つたわけですが。何か、因縁のようなものを感じ、これが私の最後の勤務校だと心に決めたものでした。

当時の村田学園は、簿記学校も女子商業高校も戦災後の木造の仮建築で、施設・設備も不十分でしたが、内容はまことに活気あるもので、教職員も生徒も明るく一体となって努力しておりました。和気あいあいの楽しい思い出がたくさんあります。

謙造先生がお年を召されるとともに、常に補佐的な立場におられた照子先生も大変だったと思われます。特に昭和五十年二月、謙造先生の入院から、三月のご逝去までのご心痛、その後の後継者としてのご苦悩は、推察するに余りあるものと考えております。

当時から現在にいたるまでのいろいろは、限りある紙面では到底書き尽くせません。既に私は与えられた紙面をはるかに超えております。

この八十周年を契機として、学園を日本の教育に無くてはならぬものとするには、照子先生の聡明さ、鋭い先見の明、確固たる信念と抜群の行動力こそ、まさに適任だと信じております。これに教職員一体の活動が加われば、鬼に金棒とでもいうべきでしょうか。

俗に、八は末広がりで、縁起が良いと申します。末に大きく広がって、九十周年はもちろん、百周年を超える記念の年を、現理事長で迎えられることは、決して夢ではありません。今から私はその日のくることを確信していると申し上げて、お祝いに代える言葉といたします。

村田で得たもの

村田簿記学校昭和三十一年度卒業生

水口 信一

創立八十周年、おめでとうございます。

私たちが、村田簿記学校に昭和三十一年にお世話になりました頃は、本校は木造二階建て（本科の生徒は主に中学卒業生）、別館はスズラン通りの焼け跡ビルにベニヤ板で内装した教室（本科の生徒は高卒以上の人）でした。

私は、普通男子高校を卒業して、大学の代わりに別館の本科へ入学したのですが、男女共学で、年齢は十八〜三十五歳ぐらいでした。出身地は北は青森・新潟・埼玉・千葉・神奈川・東京と、いろいろな人の集まりであり、担任の和田健治先生、教頭の藤田誠一先生、西川茂次先生（当時は我々より少々先輩で、紅顔の美青年？）に簿記の各科を習得し、ほかに珠算・習字の科目で普通高校ではお目にかからぬ科目にとまどったものでした。

一学期が終わる頃になると、目的意識を持った人が多かったせいか、数人のグループができ、実務に検定試験にと勉強に励むようになりました。私は数人の人と専修課程に一年学びましたが（内、田口氏、斎藤氏が税理士に合格したようです）、家業を継ぐため、勉強を断念いたしました。



三十一年過ぎた今でも、二年間一生懸命勉強したことが、五十一歳になる今までに、紆余曲折はありましたが、己の自信となり、人生を乗り越えております。

因みに小生の二年間の成果、珠算日商一級、全商実務計算二級、簿記全商一級、全経一級、日商珠算満点賞二回、税理士簿記論、財務諸表論取得でした。

人間、若い時にどこかで半年でも一年でも充実した時期が必要だと思いましたが、師に恵まれ、友に恵まれた二年だったと思います。

私は下町浅草生まれ浅草育ちのせいかな、友だちと夜を徹して語り明かしたのですが、今でも同クラスの友で、伊藤康雄（豊島区東池袋 小西酒店）、上野好一郎（北区志茂町 上野屋酒店）、都築広江（八千代市 商社会社次長）、永田泰久（神奈川県開成町 永田商店）、長谷川忠男（厚木市 厚木国際カントリー）、米良庄市（水戸市 四国ゴム常務）各氏とは、個々に連絡を取り合っております。後輩の皆様にも、登校が最終学校になると思いますが、勉学に励みながら、良い友を作ってください。

校長先生はじめ各先生、職員の皆様いろいろな世話になっておりますが、お身体に気を付け、「村田簿記学校」の伝統と実績を世に示すべく、「創立百周年」に向けて、一層のご努力をお願いいたします。

思い出

村田簿記学校昭和四十年卒業生

松井 宏邦



卒業してはや二十数年が経つ。当時、父の経営する会社に席を置いていた私であるが、どうしても経営に不可欠な簿記を習得しなければと思い立ち、夜間に学習ができるところをということで、村田簿記学校夜間部に入学することに決めた。

その頃の夜間部は、一年制七クラス、一クラス六十余名の生徒が学んでいた。高校時代すでに簿記を習得してきた者、そして、私たちのようにまったく初歩の者など、生徒の顔ぶれもまちまちであった。担任の竹内先生から、クラス全員「初めて学習する」ということで指導していく旨説明があり、第一日目からスタートした。

借方・貸方・仕訳などという聞き慣れない簿記用語や数字の書き方・線の引き方などを初歩からしっかりとご指導いただいたことが、現在、仕事の面でとても役立っていると思われる。「借方・貸方は常に一致する」という基本的な約束ごとは、計算面だけではなく、物事の考え方、対処の仕方においても共通するものといえるし、私の生活の信条として、いつも頭に置いていることもある。

四月に入学し、まず、六月の日商簿記検定三級受験に向け、六時から九時まで毎日勉強をした。習った問題がわからない時は、商業

高校出身の友人によく教えてもらった思い出がある。三級に合格、次には二級に向け、会社会計と工業簿記の授業があり、工業簿記は中杉先生に、会社会計は竹内先生にご指導いただいた。

また、その頃の楽しみのひとつはテストの日であった。その日は一時限で終わりとなるので、友人達と麻雀をしたり飲みに行ったりと、大学生・社会人と、いろいろな立場の者達が集まってきたので非常に活気があったし、良く競い合って勉強したものだ。

十一月、日商二級に合格、まだ上に税理士等資格受験もあるということで、ちょうど学校側も二年制を作るという時期だった。翌年、日商一級にチャレンジしてみようと考えた。

まず、一月に全商一級受験。満点賞があるということを聞いたので受験したが、会計の問題で一間うろ覚えのところがあり、ミスしてしまった。おかしなもので、今でもその時間違えた問題は覚えている。金額は確かではないが、仕訳の問題で、手形割引について評価勘定を対照勘定と取り違えて回答したことである。この経験は、後日の私にとって一番の教訓となった。勉強というものは、これで良いということがなく、完全に理解しなければ駄目なのだということがあった。

二年に進級すると、人数も一クラスとなり、日商一級を目指して勉学に励んだ。当時、ご指導いただいた、今は亡き若月先生（会计学）、小柳先生（税法）など、非常に熱心に教えていただき、念願の一級にも合格させていただき、今振り返って、学生生活の中で、本当に良き師にめぐりあい、良き友を得て、働きながらであったが、充実した時期でもあったと思う。過去・現在を通して、私が無欠席で通った「村田」の二年間の生活は、後の人間形成の意味からも貴

重な経験であった。何事も、ひとつのことに一生懸命取り組む姿勢は、どんなことにも対応できるという「村田スピリッツ」を学ばせていただいた。

二十年前を振り返り、今あらためて、伝統ある「村田」で学んだことを誇りに思っている。

やっぱり、簿記は「村田」である。

これからも、人間育成を目指し、益々のご発展を心より祈る次第である。

充実した日々

村田簿記学校昭和四十二年卒業生

江黒 咲子



創立八十周年おめでとうございます。

去る六月十一日、小野寺敏郎先生、橋本一男先生をお迎えしてクラス会を開きました。その席上、橋本先生から現在の村田についてのお話があり、校舎や教科内容等、私たちが学んだ頃には考えられなかった、一層充実した内容に一同びっくりいたしました。

卒業して二十余年、その間、世の中は、技術革新の波がすさまじい勢いで押し寄せていますが、村田は時流に遅れることなく、着実にその歩みを進め、今の繁栄を築いていることは、誠にすばらしいの一言につきます。

また、旧友からいろいろなお話が出ましたが、村田で学んだことが今でも各人の生活に確実に役立っているという事実は、真の教育とは何かという、古くて新しい問題に対する一つの答えを示しているのではないでしょうか。私自身について申せば、会計事務所を開いている夫の仕事の手伝いが多いとはいえ、できることは村田のおかげと、心より感謝しております。

それから、その当時の思い出といえば、昼も夜も村田に集まる大勢の人たちで、教室も通日もあふれていて、大変な活気に満ちていたことです。そして、我がクラスの面々は、おしゃべりに、勉強に、遊びに、いつも元気いっぱいでした。皆がいかに仲が良かったかは、クラス会はいつも二〇名を越し、カップルも一組誕生していることからわかると思います。各種の検定試験に追われてフーフーしていたはずなのに、なぜか皆の笑顔と笑い声ばかり浮かんでいます。

さらに村田の特筆すべき点は、先生方が実に個性豊かで快活で、かつ教育熱心で、あの歴史がしみついた職員室のなごやかな雰囲気は、今思い出しても心が暖まります。

本科卒業後、税法の教室で偶然知り合い気のあった友だち一〇名は、その後も行動をともにして勉強を続け、全員税理士試験に合格しました。その内の一人と結婚して、現在の私の家庭があるのですから、村田は縁結びの神様でもあります。

村田にはじまって三年余り、大の苦手の算盤に振り回されながら、一生懸命頑張った自分の姿が目に見えます。大学四年間より質量とにはるかに勉強したと思います。

村田で今学んでいる皆さんも、かつての私たちのように勉強が大変だと騒ぎつつも、楽しく充実した日々をお過ごしのことでしょう。

そして、級友のお子さんのように、わが家の四人の子どもたちも村田で学ぶ日が来ることを今から楽しみにしています。

村田のますますのご発展を、心よりお祈り申し上げます。

私を育てた

村田簿記学校

村田簿記学校昭和四十六年度卒業生

山中 正子



村田学園創立八十周年おめでとうございます。心からお祝い申し上げます。

私は昭和四十五年から四十七年にかけての本科とその後二、三年専攻科でお世話になりました。千葉県の九十九里浜の出身で、通学には往復五時間かかりましたが、クラスには栃木の二宮町、神奈川の足柄上郡というところから通っていた人もおり、ずいぶん遠い所からきているものだとお互いに感心していたものです。

入学に際しては、最初から簿記を習いたくて入ったものではありませんでした。恥ずかしい話ですが、大学受験に失敗し、家業を継ぐための経理の勉強ということで入学したわけです。当然のことながら、簿記学校をあとどつていた私は、ここでもまた、井の中の蛙を思い知らされました。クラスには全国から集った優秀な人がたくさんおり、田舎出身の私は、これはウカウカしてられないと気を引き締めたものです。それでもこの二年間は、毎日がとても楽しく充

実しておりまして。月に一度の校外授業で、後樂園や北の丸公園、千鳥ヶ淵、神代寺植物園に遊びに行ったことも楽しい思い出です。

珠算は橋本先生に習いましたが、毎週試験をして、結果は全員に配布され、前の週より点数が下ると教室のお掃除という、かなりユニークな罰もありました。担任は辻先生でしたが、ユーモアのあるかわいらしい性格の先生で、ある時生徒に向かってこうおっしゃいました。「自分の頭はザルだと思いなさい。ザルに水を入れてもザルの目からザーザーと水はこぼれてしまい何も残りません。しかし何回も同じことを繰り返すうちにザルの目にも水アカがたまるので、勉強も同じです！」勉強の能率が上がらず、やる気を失いかけている私達に喝を入れて下さったのでした。また、房総方面が集中豪雨に見舞われた時、夜八時頃、久慈先生から大丈夫ですか？とお見舞いのお電話をいただいた時は、教室での授業ばかりが教育ではないのだなと、たいへん感激いたしました。

二年生の秋、日商簿記一級の合格を機に、税理士試験に挑戦し、五年後ようやく資格を取得できた時、やっと自信を取り戻すことができました。税理士になって十年余り、忙しい中にも実りある毎日を送っております。ここにいたるまで、影になり日向になりご指導下さいました諸先生方に心から感謝し、村田学園の益々のご発展をお祈り申し上げます。

驚きの学校

村田簿記学校昭和五十二年度卒業生

飯塚 明子



創立八十周年おめでとうございます。

十三年前(昭和五十一年)の春のこと、短大を卒業した私は、税理士を目指して経理専門課程簿記科に入学しました。

この簿記科には二年、そして、二年目から税理士コースにも並行して通い、五十五年夏まで通算四年四カ月の間、村田簿記学校に、お世話になりました。

入学した年には専修学校となったので、私たちはまだ、現在のようには、この学校を短大のようなイメージでとらえることはなく、塾や予備校と同じように考えていました。

ですから、私のように短大や大学を卒業してから入学する人や、一度社会人になってから入学してくる人も割合多く、きつと、みな勝手に授業を受け、勉強をして、検定を受けるだけだろうと思っておりました。

ところが、なんとファミリーな校風であったことでしょう！遠足もあれば、お掃除当番もあり、クラス委員もいるというので、とても驚きました。

クラスは当然、年令差のある、おもしろいものとなり、年長者が

みなをまとめて、良い刺激のある、積極的な勉強の場となりました。パズルのように問題を解き、諸則集や法令集を友達のように扱い、ジョークの中に会計規則の言葉を織り込むという特種な世界を、みんな楽しんでいたのです。

ここで印象に残ったのは、何人もの、天才とも言うべき人々に出会ったことです。珠算の段位を持った人がバラバラと、バケツ一杯の小豆をぶちまけてもしたかのような音をたてて、軽やかに、そしてあまりにも唐突に算盤をはじき始める様には、まさに芸術を感じさせられます。

また、税理士試験を、昼間はお勤めをしながら、たつたふた夏のトライで、五科目全部に合格してしまった人もいました。五科目のうち、所得税法などは、問題集の答えから逆にやり方を覚えるという方法で、四カ月しかかけずに合格したそうで、特に驚かされたものでした。

さらに、当時の副校長でいらした外山先生の、卒業式における、その年度の検定の合格者数等の報告は、記憶に深く残っております。〇〇検定の何級合格者が何名、△△試験の合格者は何名と、延々続く数字を、まったく原稿をもらいにならず、ひとつも間違わずに、淡々と述べられるお姿に、私は村田簿記学校の誇りを感じたものでした。

その卒業式の日(昭和五十三年三月、簿記科卒業)、私は村田謙造賞として、とても小さな計算機付、アラーム付の時計をいただきました。昭和五十三年は、まだ、カード電卓などというものもなく、マイコンブーム、コンピュータ時代の夜がようやく明けかろうとしている時代でありました。

こうして、いろいろな人と出会い、導かれて私はこの学校で、多くを学ぶことができました。簿記や税法を学ぶうちに、社会というものに初めて目が開かれる思いをしました。先生方や友達との人間関係の中に、豊かな心や、たくましい生き方を見出すことができました。そして、「経理のエキスパートであれ」「ミスは許されない」という、村田照子校長先生の言葉には、常に叱咤激励され、実務を離れて家庭に入り、子育てに勤しむ現在においてなお、その言葉は私の心の中で、「努力せよ!」「責任を持て!」と形を変えて聞こえてきます。

これからも、村田簿記学校が、多くの方々の社会への道しるべとして、明るい光をともし続けられますよう、卒業生のひとりとしてお祈りいたしております。

卒業生からの手紙

「H先生へ」

村田簿記学校昭和五十三年卒業生

田島 英子



ご無沙汰いたしておりますが、お元気でしょうか? 私が村田簿記学校にお世話になってから、もう十年程が過ぎてしまいました。今や押しも押されぬ一人前の税理士とご報告いたしました所ですが、相変わらずおっちょこちょい、貫禄皆無の明るさだけが取り柄の私です。「学園生活についての思い出など」というご

依頼に、「はて、何を書こうか？」と頭をかかえてしまいました。私が村田簿記で過ごした四年余りの思い出といえば、ただこの一言につきます。

「あんなに勉強したのは初めて！」

簿記科二年制に入学した当初は、「まあ経理でも身につけておけば……」という軽い気持ちだったのですが、息つく暇もなく検定の連続。大学卒業後、しばらくブランクのあった私にとって、かなりハードなものでした。十歳近く若いクラスの仲間達の若さとフアイトにもずいぶんと助けられました。そして、なによりも諸先生方の熱心かつ適切なご指導により、なんとか税理士試験にも合格することができたのだと思っております。改めて、御礼申し上げます。

現在、実務に携わる者として、短期の研修で、即戦力として役立つ経理マンの必要性を強く感じております。私自身、村田で学んだことによってどれほど助けられたでしょうか。これからも良き指導陣のもと、有能な人材が育成されることを確信いたしております。

H先生、先生の授業、本当に楽しかったです！今でもあのようなユーモラスで厳しい授業をなさっておられるのでしょうか？

もう一度、教室に戻って、あの緊張感を味わってみたいと思います。最後になりましたが、先生方のご健康と、村田学園のご発展をお祈りしております。

それでは、またいつかお目にかかれることを楽しみに……。

心に残る言葉

村田簿記学校昭和五十五年度卒業生

中町 貴美



この度、わが母校、村田簿記学校が、創立八十周年を迎えられるにあたり、一言お祝いを申し上げます。

私が村田簿記学校に入学したのは、今からちょうど十年前です。単身上京し、右も左もわからない東京での生活。期待よりも不安の方が遙かに大きく、流されまいと必死に強がっていたあの頃が懐かしく思い出されます。

入学式での校長先生のお言葉で、今でもはっきり覚えている事が二つあります。一つは「資格は与えられるものではなく、自分の努力によって奪い取るものだ」というお言葉です。これで、今までの中途半端な学習態度を一喝され、改めて自分の選んだ道の険しさを思い知らされたものです。もう一つは、「資格を取得しても、人間的に欠陥があったのでは何の意味もない」という、これもまた厳しいお言葉でした。

幸いにも、私は税理士試験に合格することができ、現在、会計事務所に勤務しておりますが、十年前のこれらのお言葉を思い起こすたびに、身の引き締まる思いがいたします。顧客と税理士という立場であっても、最終的には人と人、人間同士の関わり合いなんだと、

仕事をするほど、痛感しています。

在学中は、資格取得のためだけに、ひたすら勉強しているような気がしていました。しかし同時に、義務教育でもないのに、なぜこんなに厳しいのだらうと思うほどの生活指導がありました。服装、言葉遣い、お化粧にいたるまで……。今にして思えば、そのような日々の生活の中で、専門的知識はもちろんの事、顧客からの信頼が得られてこそその税理士だという、職業会計人としての心構えを御指導して下さったのだと思います。素晴らしい恩師に恵まれたこと、心から感謝しております。

人間としても、会計人としても、まだまだ未熟で勉強不足ではありますが、これからも、村田簿記学校の卒業生であることに自信と誇りを持ち、その名に恥じぬよう、精一杯の努力をいたします。

最後に、校長先生をはじめ諸先生方の御健勝、御活躍と併せて、母校の限らない御発展を祈念申し上げまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

「意欲」を知った

村田簿記学校

村田簿記学校経理高等課程二期生

(昭和六十一年卒業)

小林 賢守



私が村田簿記学校経理高等課程商業科へ入学することになったきっかけは、たまたま姉が同校の専門課程に入学していたこと、そし

て、私が最初から商業科を希望していたので、専門の学校の方が良いと思い、姉の勧めにしたがって高等課程へ入学を決めたのです。

入学後の私には、一人暮らしなど、すべてが初めて経験することばかりで、何もかもが新鮮に感じられました。福島から東京へと生活環境を移し、学園生活が始まり、多くの友人と知り合うことができました。学習の面でも、簿記などは私にとって大きく運命を変えきつかけとなったのです。それまでの私は、勉強に対する意欲がなかったのですが、簿記が私にやる気を与えてくれたのです。そして、私は人が変わったように簿記を勉強するようになり、一年生の十一月には日商三級に合格することができ、これをステップに同年度の一月から日商一級をめざして同校の夜間の専攻科にも通うようになりました。不思議なもので、簿記を学ぶうちに、特に勉強したという意識はなかったのですが、他の科目もある程度の成績に達してきました。この時から私の中に勉強に対する意欲が少しずつ生みれたのです。

二年生になるとクラス替えもあり、担任の先生も変わり、新しいクラスでの生活が始まりました。六月には日商二級に合格し、学園生活は、学習面も生活面も充実していました。この頃、担任の先生の影響もあり、大学に対する興味が湧いてきました。それまでは私には簿記しか見えなかったのですが、ほかのいろいろなことの大切さに気づきはじめてのです。その後、中断していた夜間の専攻科に十二月から再び通うようになり、日商一級を目指して再スタートをしたのです。

これまではすべて順調でしたが、日商一級の壁は厚く、三年生の六月にまずチャレンジしたのですが、不合格。再び十一月合格をめ

ざして頑張りましたが、六三点という結果に終わりました。この時私は、「自分にとって簿記はいったい何だったのだろうか」という絶望感を初めて味わいました。そんな時に希望を持たせてくれたのが、中央学院大学合格という出来事でした。十二月に中央学院大学の推薦入学試験を受けたのですが、おそらく落ちてしまうだろうと思っていたのです。しかし、結果は合格。私にとっての新しい道が切り開かれたのです。

この日商一級受験の失敗から大学合格までの間、心の支えとなってくれたのは、担任の先生でした。この時期の、なにげない態度での先生の私に対する接し方が、今でも忘れられません。卒業式の日、思わず担任の先生に泣きついてしまいました。

今、こうして高等課程での三年間を考えると、私にとってもったいないほどの友達、夜間の専攻科で知り合った人々、そして、諸先生方にめぐりあえたこと、ほか、普通の同年代の人には経験できないさまざまな経験など、充実した、私の将来につながる大きなステップを踏むことのできた三年間でした。

大学入学後は、一年生の六月に日商一級に合格し、二年生の夏には税理士試験で簿記論に、翌年には財務諸表論に合格できました。これらはもちろん村田で勉強したからでもあるのです。今では、大学の経理研究室に席をおき、毎日同じ目的を持った人たちと勉強を通じて大学生活を送っています。

今まで書きましたように、村田での三年間は私に新しい道を見つけてさせてくれたのです。これも諸先生方、そして周囲の人々のおかげです。これから、村田の校訓である「あきらめない、あせらない、一步一步努力する」ことを忘れず、自分の将来の夢に向かって

頑張っています。

今後も諸先生方のご指導を、よろしくお願いいたします。

「有算者勝」を 心に刻み

村田女子商業高等学校

昭和二十八年卒業生(第一回生)

飯田 幸子



村田学園創立八十周年おめでとうございます。卒業生の一人としてお祝いできますことを、大変光栄に存じます。

私が村田女子商業高等学校を卒業いたしましたのは、今から三十五年前で、第一回卒業生として、母校の歴史の一頁に名を連ねさせていただいている光栄にも浴しております。

振り返ってみますと、当時は一クラスの小さな学舎でしたが、中味は近頃と比べますと、何と贅沢な環境であったかと思われまふ。大勢の先生がいらっしゃり、教師と生徒の関係をこえた人と人の出会いがあり、ある時は友とも先輩ともなっていただき、明るい笑声に満ち、仲睦まじく、幸せて、温いゆりかごの中に育てられました。その中で、学問だけでなく、多くのものを学ばせていただきました。

先代の校長先生は、女子職業教育を重点に、「有算者勝」のお言葉のもとにご指導下さいました。多くの職場に母校の卒業生の活躍ぶりを聞くにつけ、大変誇らしく、私が永年経理の仕事に従事できましたのも、また諸先生方のご指導のおかげと、今更ながら感謝して

おります。

家庭に入りましても経済のやりくりは重要な仕事で、その上手・下手は家庭経営を左右いたします。計算に強いことはいろいろな面で得をし、合理的に物事を進めて行く上にも役立っております。最近のややこしい消費税の計算も、ちよつと暗算して電算機の出す計算より早く金額を出したりしてびっくりされる事もしばしばありそんな時、少し優越感を味わったりいたします。そして、商業科教育を受けてつくづくよかったとも感じます。

現在の世界経済の動きは、日々はげしく動いており、そんな折こそ、「有算者勝」のご教訓を肝に銘じ、一人ひとりがよりよい世界経済の繁栄を、正しい判断のもとに心がけていかなければならないのではないのでしょうか。

母校の果たす役割も大きく、今後の益々のご発展をお祈り申し上げます、祝辞とさせていただきます。

在学当時を顧みて

村田女子商業高等学校

昭和二十八年卒業生(第一回生)

泉水 道子(旧姓桜井)



わが「村田学園」が平成元年十一月をもって創立八十周年を迎えますことに、心からお祝いを申し上げます。

私は、学園の姉妹校であります「村田女子商業高等学校」を昭和

二十九年春に卒業しました。光陰矢のごとしの喩えのように、月日の過ぎ去るのは早いもので、はや三十年余になりました。母校の記念の時にあたりまして、在学時の様子を思うままに書かせて頂きます。

創立者村田謙造先生にはじめてお会いしたのは昭和二十六年春の入学式のこと、背筋を真直に伸ばされた身だしなみのいい校長先生と強く印象に残っています。在学中はあまりお目にかかれませんでした、この姿はいつもお変わりなく、お会いする度に「さすがだ」と感心いたしました。ある時の訓話の中で、「一日一善」を励行するようにおっしゃられたことも印象の一つです。卒業後の生活のなかでふとこの言葉を思い出し、少しでも実行しようと思うのですが、正直のところできません。また、とても達筆な先生で、これは現校長であられます村田照子先生も同様ですが、一年生のいつ頃でしたか、一人ひとりの生徒の氏名を丁寧に書いて下さったことも記憶にあります。その時、ほのかな香水の匂いを漂わせておられて、なかなかおしやれな校長先生ということも知りました。

入学時の生徒数は、計理科が約六十五名、普通科が二十七名で、ほとんど一緒に学習しました。ただ、各科の学習内容が違うために、週の内の何時間かは、普通科の生徒は第一教室へ移動して学んでいました。倉、籠宮、磯野、坂下、金子諸先生方に教えて頂き、なかでも倉先生には特別にお世話になり、今年九十歳になられますが、ご健在でいられます。

私は計理科に入学しまして、昭和二十七年春に一応この科を卒業、後に普通科二年へ編入させて頂きました。校舎といいますが、木造平屋の職員室と三教室が横一列に並んでいて、その前に校庭があり

ました。入学式・卒業式、その他なにか行事のある時は、第二・第三教室の仕切りの戸を左右に開いて式場として使いました。

昭和二十七年秋頃だったでしょうか、門を右側に、モルタル二階建ての新校舎ができ、生徒は新しい気分です。学習しました。このような家族的な高校生活の間には、一年の時の昇仙峡への遠足や、体育時にダンスを教えて頂いて楽しかったこと、東北方面への修学旅行で中尊寺へ寄って藤原三代の豪華の素晴らしさに感動したこと、ソロバン・簿記の検定試験に合格してうれしかったこと、第二回生の入学式の時に、在校生を代表して迎える挨拶の途中で言葉が出なくなつて恥しい思いをしたこと等々、沢山のことが走馬灯のように思い出されて懐かしさで一杯です。そして、改めて母校で学ばせて頂いたことを深く感謝しています。現理事長・校長先生であられる村田照子先生には、お体を充分ご留意なされて、学園の益々のご発展を心からお祈りしつつ、この拙い稿とさせて頂きます。

桜並木と紺の制服

村田女子商業高等学校

昭和三十年年度卒業生第三回生

長谷川恵子(旧姓穂谷)



村田学園創立八十周年、おめでとうございます。学園八十周年のあゆみの数々に、前校長先生、現校長先生のご苦勞いかにばかりかと、頭が下がる思いです。

昭和二十八年四月、桜並木路を紺の制服に身をつつみ、胸躍らせて入学した頃の学園は、校門を入ると、正面に職員室と事務室、事務室の左側に講堂と音楽室、右手に二階建ての校舎、一階に三年生と二年生、二階に私達一年生の教室、校庭にはクローバーが生えていたのどかな風景でした。

二年生の夏休みに高原生活が軽井沢でありました。現在の北軽井沢の寮ではなく、農家の二階で、下は牛小屋だったような気がします。鬼押出しに宿舎から歩いて行き、途中の牧場で飲んだ牛乳のおいしかったこと、三角に握るオムスビを、校長先生から習ったこと。その頃は冷房のない時代でしたので、軽井沢の高原を渡ってくる風の涼しさは、今でも、忘れられません。

修学旅行は四国、大阪、京都と周り、祇園祭りの時には京都にいました。テレビ、新聞などで祇園祭りが話題になると、修学旅行を思い出します。

私達三回卒業生は、A・B二クラス一〇七名と小人数でしたので、まとまりがよく、卒業以来、毎年クラス会を続け、校長先生、坂下先生には、お忙しい中、ご出席いただき、学校の様子をうかがい、市川校舎にも女子商の校舎にもおじゃましていますので、今でも在学しているような気がします。

今年のクラス会は、六月十・十一日に熱海で一泊しました。芸達者が大勢で、一六・七歳の頃の気分になり、修学旅行の再現のごとく寝ずに語り明かしたりと、にぎやかに一夜を過ごしてまいりました。

学校から就職して三十数年、同じ会社に勤めている方も参加してくださいました。就職・結婚・その他いろいろあり、私達の年齢に

なりますと、今の言葉でいうシングルの方も、年々出席数が多くなっています。ほとんどの方が、充実した人生を歩むために、自分の仕事を持って、前向きにたくましく、子育てに社会にと頑張って、卒業以来の歳月の流れを感じませんでした。

娘達が小学生の頃、女子商の制服の生徒さんを見かけると、とても懐かしかったので、娘二人を母校に入学させました。

村田では、校長先生、諸先生方、校友会の方々、同窓会、同級生と、数多くの方々と知り合え、お友達になれました。友達は、かけがえない私の財産です。私の人生に楽しい思い出をたくさんありがとうございました。

村田学園のますますのご発展と、校長先生のご健勝を心より祈念いたしております。

三十年の時の 向こうに

村田女子商業高等学校

昭和三十三年卒業生(第六回生)

長崎 英子(旧姓池上)



村田学園創立八十周年、おめでとうございます。私が村田女子商業高等学校に在学したのは、昭和三十一年四月から三十四年三月のことでした。また本造の二階建校舎で、今の本校や市川校舎からは想像も出来ない狭い校舎でしたが、今とは時代が違い、それがあたりまえと感じていました。

一年生の担任は坂下愛子先生で、卒業以来三十年後も、友達と一緒に時々お会いする関係が続いていることはとても幸せに思います。あの頃は、箸が転んでもおかしい年頃といまでしょうか、授業中もよく笑っていました。特に珠算の越先生の時間には笑い過ぎてお腹の筋肉が痛くなったのも楽しい思い出です。

あまり勉強が好きでなかった私がつと勉強したいと思うようになったきっかけは、夏休みに村田簿記学校へ通った一カ月余りの体験でした。十二月の冬休みには、学校からの推薦で、証券会社で一週間ほどのアルバイトをやり、生まれて初めて自分で働いたお金を受け取った時の感動は忘れられません。

二年生ではクラス替えがあり、親しい友人や坂下先生とはクラスが違い泣いたりしたことも、今では高校時代の懐かしい思い出になっています。二期には、私の一生にとって一番悲しい母の急死があり、先生方や友人にいくら慰められても、心の痛みと淋しさは消れませんでした。その母の三三回忌を、今年、九月のお彼岸に行う事になっています。私にとっては、高校時代と母の死とはいつも重なり合って頭の中に甦って参ります。

二・三年はクラス替えはありませんでしたが、担任であった体育の磯先生はお辞めになり、国語の山本先生が担任になりました。

二歳年下の妹も村田に入学し、卒業までの一年間を二人で毎日登校できたことはうれしかったものです。結婚後も、姉妹・兄弟同士の結婚ということで十日に一度ぐらいは会え、子どもの幼い頃は、二家族一緒に旅行も度々でき、この先、死んでも同じお墓に入れるのは心安らぐ気も致します。母が早く亡くなった分、妹とは特に強い結びつきになったような気がいたします。

秋の運動会では、商業高校でしかやらない暗算競争があり、運動の苦手な私でもこれだけは三年間、一等をとることができました。

二期には就職試験が始まり、私も協栄生命保険(相)に入社が内定、十二月には、三年生全員が西武デパートへ実習として各クラス一週間ずつ売場に立ち、帰宅する時は足が棒のようになり、一日中立つてお客様に接するのがいかに大変かを痛感いたしました。私は簿記と珠算がとても好きでしたから、経理事務を希望していたので、余計そう感じたのかも知れませんが、その気持ちは現在まで変わることなく、商業高校で三年間学んだ勉強が基礎になり、卒業後も夜、簿記学校に通ったりして、勤務先は何回か変わっても、仕事は経理以外をやったことはなく、やはり私の性格にあっているのだと思います。

三期になり、山本先生は御妊娠のためにお休みとなり、村田照子先生(現理事長・校長先生)が担任となりました。三月には、卒業式を迎え、四月から一社会人として巣立たせていただきました。このような文章を綴ることによって改めて三十年前を思い返し、母の死後は、学校からの帰りに八百屋さんなどで買物をし、夕食の支度などをして通学していた自分が在ったことを久し振りに思い出しております。人生いろいろなことにはぶつかりますが、どうにか切り抜けられるという感じがいたします。

村田女子商業も発展し、後輩も沢山になるだろうと思いますが、時代の違いはあれ、同じ学校で学んだということは一生の思い出につながり、同じ制服を着ている女子校生を見るのはうれしく思います。本校で一般教養科目を、商業高校としては最先端技術を備えた市川校舎で実務を学べる今の生徒達はとても幸せなことであり、立

派な社会人として巣立って行かれますよう願っております。

毎年六月の第一日曜日に開かれる同窓会にはできるだけ出席するようにしておりますが、同級生の出席の少ないのは淋しい思いがします。お会いすれば不思議と三十年前の自分に戻っているのを感じ、懐かしい先生方のお顔に出会えた時の喜びはうれしいものです。白髪になられても若い照子先生、何時でも優しい坂下先生、磯先生の奥様になられた神田さん、独得の声の小沢先生、そして卒業してからお勤めになられた諸先生方ともお話でき、村田女子商業高校を通して人間の触れ合いも広まり、これからも少しでも人間として成長できるよう、毎日を歩んで行きたいと思っております。

五十周年と新校舎 完成の頃

村田女子商業高等学校

昭和三十六年度卒業生(第九回生)

松川 良子(旧姓梅津)



学園創立八十周年おめでとうございます。この慶びの日を迎えることができたのも、いまは亡き村田謙造先生をはじめ、諸先生方の多くの御苦労がありましたお蔭と思い、今、感謝の念で一杯です。

母校を巣立ち二十八年目。月日の過ぎる速さに驚いております。顧みれば、一年生の時に、創立五十周年の祝典が神田の共立講堂で行われましたことが昨日のことに思い出され、その式典を迎

える年に入学できましたことを、とても光栄に思いました。

地元で生まれ育ち、小・中・高校と進級することに家から学校までの道程が短くなり、通学時間は徒歩で五分位でした。幼児の時から通学するお姉様達の姿を拝見しておりましたので、小さいながら「上の学校は、家に一番近い村田に入るんだ」と、秘かに決めていました。小学二年生の頃、町並が区画整理中で道路の幅も狭く、舗装もされていないデコボコ道の坂の上から学校めがけて自転車に乗れるように、よく練習したことを懐かしく思い出します。この道路は現在の学校前、桜並木の道路です。

昭和三十四年四月、運よく村田女子商業高等学校に入学することができました。木造二階建ての校舎で、二棟の校舎がV字型に建ち、校庭は狭く、体育の時間は道路の向かいにあった共同印刷のグラウンドをお借りし、そこで授業を受けました。その年の十一月には学園創立五十年式典が行われ、式後祝賀会が開かれ、タンゴ歌手の藤沢嵐子、早川真平とオルケスタ・ティピカ東京の楽団、伊藤素通とリリオ・リズム・エアーズのコーラスグループ等の素晴らしい響に感激いたしました。二年生になると、半分できあがった鉄筋校舎に、教室が移り、そこで授業を受けました。三年生の十一月に新校舎が完成し、竣工式・式典が行われ、在学中二度の祝賀行事に参列することができました。在学中に得た和文・英文タイプ、簿記・珠算等、今日までとても役に立っており、諸先生方に感謝いたしております。

最後に、A組(担任小澤勇先生)の近況を、お伝えいたします。年一回クラス会が開かれております。昨年クラスの住所録を作成し直しました。その甲斐あって、六十一名中、五十九名の情報が分かりました。昨年、本年とクラスの三分の一、約二十名の方々が集ま

り、和やかな一日を過ごし、近況、思い出を語り合いました。わがクラス会には、他のクラスの方も数名出席しております。

今後も九十周年に向かって、学園の益々の発展を願っております。あらためて、学園創立八十周年おめでとうございます。

思い出のブラスバンド

村田女子商業高等学校

昭和四十一年度卒業生(第十四回生)

藤曲美知子



創立八十周年おめでとうございます。

私にとって、村田での高校生活イコール、ブラスバンドの部活動でした。私は二年生からの参加でしたが、その頃ブラスバンドは、三年生の熱意でできたばかり。創立者の三年生は大変熱心で、また、外部から講師の先生もみえ、活気にあふれておりました。また、軽井沢に学校の夏季施設もできて、夏休みは各部その山荘で合宿をしました。早朝からの練習は、厳しいものでしたが、その中でも思ひ出れる部の「和」は大変貴重なものでした。そして、何よりも思ひ出深いのは、合宿の最後に行われるキャンプ・ファイヤーです。そして、そのキャンプ・ファイヤーのクライマックスは、宿舎でまっすぐに準備されたおぼけ作戦は、その頃の若い私達を、驚かすのに充分であり、その年々の意表をついた趣向で、私たちを興奮させたもの

でした。夏休みも毎日毎日学校で練習をし、本当に高校では、勉強より部活の方をよくやったと今でも思っています。そして、その頃の友人とは、未だに近況を連絡しあうよき友達です。

また、卒業を間近に控えての照子先生の特別講義も思い出深いものです。働くということとお勤めということ、仕事をさせていたかどうかという心構え、これが社会に出ていかに大切か、そして、女性として、母として、そして社会人として、長い人生を意欲的に生きるということ、先生自身の生き方として私どもに示して下さいましたことは、後々私にとって大変参考になりました。二年前、十数年ぶりにクラス会を開いた折しも、三〇名以上も集まったメンバーの一人もタバコをすっていた人がいなかったことが、後で皆で感心したことの一つです。

今でも照子先生が校内をさっそうと歩いていらした姿が目に残ります。楽しかった学校生活を思うにつけ、今度高校に入る娘に、私のように思い出に残る、青春そのものである日々を、親として感じさせることができればと願わずにはいられません。

最後に、学校の益々の発展と、照子先生はじめ、諸先生のご活躍をお祈り申し上げます。

初心を忘れずに

村田女子商業高等学校

昭和五十五年卒業生第二十八回生

桑原 和代



わが母校村田学園が創立八十周年を迎えるにあたり、心よりお祝い申し上げます。

さて、私が入学いたしました年は、今までにない多人数で、クラスは八クラスもありました。体育祭の応援合戦の時には、ほかの学年に比べて迫力があり、観客席からのどよめきがあつたくらいでした。今思えば、何をするにも人数が多く大変でしたが、とても楽しく過ごすことができました。軽井沢での合宿や修学旅行での二班に分かれての行動では、校長先生に何度も足を運んで頂きました。また、就職につきましては、先生方が一番ご苦労されたことと存じます。しかし、村田卒業という厚い信頼のもと、皆が就職できたことは偏に先生方をはじめ先輩方のお蔭と、心から感謝する次第でございます。

また、村田で学んできたことが、現在の私にとりまして大きく影響していることが多々あります。校長先生みずからの講義も、新入社員のあり方や社会での常識等、他の学校にはない貴重な授業でした。そして、幸いにもクラブ活動においては珠算部の部長を務めさせて頂きました。協調性や人を指導する上での難しさを学ぶよい経

験となりました。

私事ではございますが、卒業いたしまして第一勧業銀行という立派な会社に就職させて頂きましてから、早くも九年目となりました。三年前のことですが、店頭で村田の授業料を納めにPTAの方がご来店になりましたので、私も村田を卒業した者だと伝えたのでした。そして、先日「お蔭で娘も証券会社勤めることになりました」と、再びご来店になりました。私はとても嬉しく思い、一緒に喜ぶと同時に、自分が就職先内定の通知を受けた時のことを思い出しました。

三年間、早朝練習をして簿記や珠算の検定に挑んだことが、今では合格証書として大切な財産となっております。「初心忘るべからず」これからも村田の卒業生として恥じないよう頑張っていきたいと存じます。

最後に母校の益々のご発展を心からお祈り申し上げます。

厳しさから学ぶ

村田女子商業高等学校

昭和五十八年度卒業生(第三十一回生)

入江香江子



このたびは、村田学園が創立八十周年を迎えられるということで、私たち卒業生としても大変誇りに思っております。

早いもので、私も卒業し、社会人になり、五年という月日があつ

という間に過ぎてしまいました。今現在も自分なりに充実した生活を送っておりますが、高校生活の三年間も、今とは違ったさまざまなことがありました。それらは、今思えば楽しいことですが、その当時はやっぱり苦しかったり辛かったりと感じたものです。

中でも思い出すことは、珠算や簿記の検定に向けての早朝練習や、放課後遅くまで残って勉強をしたりしたこと、あるいは、一日一時間目から六時間目のほとんどが突然「簿記」という二文字に入れ替り、その頃になるとただただ恐怖の二文字でした。朝早ければ当然ねむいし、放課後遅ければ遅いで自分の時間を持つことも不可能になり、なお宿題などがたてた時は……。もう今思えば全部が自分自身のためなのに、なぜこんなにまでして毎日やらなければいけないのかと、友達同士で文句をいいながら勉強していたことを思い出します。しかし、簿記検定の合格発表の当日は、気がついたら私も友達もみんな目から涙があふれていました。その時の感動がつい昨日の様な気がします。

このように、三年間一つの目標に向かって努力し、また、がまんをしながらやりとげる、「忍耐」ということを学ぶことができました。そのほかに、やはり生活指導が厳しくて、朝の登校調査はちゃんとしていると思いつつも、思わず立ち止まり、あちらこちらを見てドキドキしながら門をくぐったことを思い出します。今では、そんな素晴らしい思い出を時折頭に思い浮かべては仕事をしている今日この頃です。素晴らしい思い出とともに、今日こうして社会人として頑張ってこられたのも、長い年月をかけて伝統を築き上げてきた学園、そしてすばらしい先生方のおかげだと感謝しております。今後ますますの母校の発展をお祈りして、お祝いの言葉とさせて

いただきます。

新たな山を越える

踏台

村田女子商業高等学校
昭和六十年卒業生(第三十三回生)

篠 千景



村田学園創立八十周年、おめでとうございます。

私はこの伝統ある学園に学んだことを、とても誇りに思っております。村田女子商業高等学校を卒業して四年になりますが、在学中の三年間は数多くの経験をさせて頂きました。校舎の前の桜並木が満開だった入学式から、学年対抗の体育祭、遅くまで残って準備をし、大成功だった村田祭、夏休みの北軽井沢、早朝練習をし、みんなで目の色を変えて頑張った簿記や珠算の検定試験など、思い返してみればきりがありません。

淡淡とした学校生活を送り卒業することはとても簡単なことです。しかし、村田の授業では、社会に出るために必要な知識や技能を教えて下さいました。簿記や珠算はもちろんのこと、ワープロ・ペン字・商法と、今では多くの会社員が高額な授業料を出さなければ身につけられないことを一から習うことができたのも、この村田だからこそではないでしょうか。なかなか上手いかず、悔しい思いをしたこともあります。山あり谷ありの数年を味わえたことが、これからあるかもしれないと高い山を越える踏み台となれば、素

晴らしいことだと思えます。少し大げさかもしれませんが、それほどまでに、今まで学んできたことが現在勤めていく上で役立っております。本当にありがとうございます。

この思い出深い学校は、私の家から近いということもあり、年に数える程ですが、バスなどで坂の下を通り、校舎に近づくと思わず身を乗り出して見てしまします。壁が白く塗りがえられたな、看板の位置が変わったのかな？ そんなことを思いながら、在学中のたわいのない出来事を一瞬振り返ったりするのです。これからは変わることなく、母校を懐しみ、この輝かしい時を将来に伝えられるよう、私達が大切にしなければならぬと思います。

この八十年という長い歴史と伝統は、村田学園の皆様の多大なご努力の賜物と心からお喜び申し上げ、益々のご発展と伝統を守り続けられることをお祈りいたします。